令和７年４月
卯　月

あ　お　ぞ　ら

第４１０号

鹿屋市青少年育成センター
鹿屋市共栄町２０－１　℡３１－1138
（鹿屋市教育委員会　生涯学習課）

「補完性の原理」とは

鹿屋市青少年育成センター所長
（鹿屋市教育委員会生涯学習課長）宇井　知隆

令和７年度がスタートしました。「あおぞら」をご覧の方々も、新たな気持ちで新年度を迎えられたことでしょう。

鹿屋市青少年育成センターでは、教育相談や街頭での指導、非行防止、環境浄化など関係のある機関・団体との密接な連携の下、青少年の育成活動を総合的に推進しています。青少年を取り巻く状況は、昭和57年のセンター設立当初から大きく変化しています。今後ともセンターでは不易と流行を踏まえつつ、青少年の育成支援に取り組んでまいります。

さて、皆さんは「補完性の原理」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。以前、ドイツ連邦共和国に青少年育成に関する研究のために滞在したのですが、特に印象に残っている言葉として紹介します。

「補完性の原理」とは、決定や自治はできる限り小さい単位で行い、できないことはより大きな単位の団体で補完していくという概念のことです。まずは個人で、できなければ家族、できなければ団体で取り組み、それでもできなければ行政に頼るというイメージだと分かりやすいでしょうか。ちなみに、ドイツには社会課題の解決を決定していく団体の一つとしてフェライン（Verein）という組織形態があり、地域に根差した団体としてスポーツや文化活動などに取り組んでいます。日本で言うＮＰＯ法人に近いかもしれません。

フェラインは、国や県、市町村に頼ることなく意思決定を行うことで、地域における社会課題の迅速な解決につなげていきます。行政は初期段階で資金を提供することもありますが、基本的には見守りながらフェラインの意思と活動に委ねます。フェラインは地域住民の真の自立につながるシステムであると当時感銘を受け、仕事でもプライベートでも動き出す際の指針になっています。

もちろん、意思決定に行き詰まった時には誰かに頼っても構いません。ただ、その際にも自身（団体）としての意思をしっかり持っておくことが大切です。

「地域の青少年は地域で育てる」

鹿屋には各地域に青少年を育て見守っていこうとする環境があり、フェライン的な組織もたくさんあります。

一方で、ライフスタイルの変化や価値観の多様化、人間関係の希薄化によって、個々の地域への愛着度が弱まっているのではないかと感じています。加えて、これからの社会を取り巻く状況に対してネガティブにとらえる報道もあります。もちろん根拠があるのでしょうが、私たちはそれらに抗いながら克服するための課題にし、さらにはより良い地域を育てるために実践を重ねたいところです。

意思決定は小さな単位でシンプルに。スピード感に加え、主体性も生まれます。自分事だから解決も速いでしょう。主体性はきっと未来の地域をより良く変えてくれるはずです。まずは、これを読んでいる皆さんのスピード感に期待します。